

「教学と現代」報告

家族を支える“社会福祉、天理教のたすけ合い”

金子 昭

2月25日午後、公開教学講座に引き続いて、2016年度特別講座「教学と現代」をフォーラム形式で開催した。今回は、家族のあり方を取り上げた「これからの社会と天理教—ポスト教祖百三十年祭を見据えて」というテーマの第2回目である。

家族が多様化し、単身家庭が増える一方で、DVや老老介護、シングルマザー、見えない貧困など、家族だけでは家族を支えきれなくなった今日、家族メンバーの自助努力も大切であるが、いま必要なのは家族をどう支え、地域社会の中でいかにたすけ合いをしていくかということである。社会福祉の制度・システムが公助とすれば、天理教の教会や教友が行う支援活動は共助のひとつのかたちになる。上記のような「趣旨説明」(金子昭)に続いて、3名の発題者がそれぞれの専門分野から報告を行った。その概要は次の通りである。

「現代日本社会の中の家族の現状」

金子珠理研究員

現在、福祉削減・自己負担増の中で、地域や家族による支え合いが推奨され、「家族」がいまやマジックワードのように使われている。人々が家族に対して持つイメージの上位に「家族団らん」が挙げられるが、多くの女性にとって家庭は24時間「労働」の場でもある。女性差別撤廃条約採択と同じ年(1979年)、国内では女性を含み資産とみなす「日本型福祉社会」が目指された。在宅介護は家族が家にいることを前提としたものであるが、その家族は女性であり、そうした女性だのみの福祉はいまや限界を迎えている。

また、見えない貧困である相対的貧困の例として、母子家庭の現状(8割が就労で半数は非正規)や子どもの体験格差の拡大を確認。さらに家族関係社会支出の少なさ(国際比較)、専業主婦率と出生率との関係、保育所所在率と虐待相談率との相関関係について述べた後、DV相談ができないでいる人々(男女)に対する宗教者の役割と課題について言及した。

「家族を支える社会福祉制度とお道のおたすけ」

八木三郎研究員

現在、いわゆる結婚適齢期を云々する時代ではなくなった。未婚化、晩産化の傾向も強まり、結婚しても離婚(3組に1組)が増え、ステップファミリーやひとり親家庭が増加してきた。こうした家庭が貧困化(相対的貧困)に陥っている。また少子高齢化が進んできたことで、日本は人口減少社会になりつつある。そのため、家族内で介護することも困難になっている(家族による自助が不可能になりつつある)。家族を取り巻くそうした状況からして、もはや個人レベルの問題ではなく、社会の構造的な問題であり、社会福祉・社会保障もこれに対応する形で必要になっていると言えよう。公助・共助・自助をめぐる社会福祉のあり方については、エスピン＝アンデルセンが福祉レジーム論について比較考察を行っている。

一方、天理教では、明治43年の天理教養徳院(現・天理養徳院)創設以来の社会福祉事業の歴史がある。それは明治政府が打ち出した孤児救済、感化救済、医療の福祉施策の方針を受けているものである。第2次世界大戦後は、GHQの社会救済覚書の方針を受け、天理教でもまた新たな時代のニーズに対応すべく社会福祉事業に力を入れることになった。最近ではゴールドプラン(1989年)、新ゴールドプラン(1994年)により、ホームヘルパー(訪問介護員)育成事業を厚生省(当時)から天理教に求めてきたいきさつがある。天理教の福祉活動は「おたすけ」の一環であり、それを一言で言えば「難渋たすけ」と「互い立て合いたすけ合い」である。

「家族を支える地域社会とたすけあい社会」

渡辺一城社会福祉専攻教授

まず見直すべきは、単一な旧来の家族観に立った“性善説”的な家族像である。下重暁子の『家族という病』ではないが、旧来の家族観を見直す議論もある。次に問われるのが、どのような家族の何を支えるのかということである。現在、非正規雇用の増加などにより家族をつくること自体が困難な人や高齢者世帯を中心に単身世帯などが増えているだけではなく、複合的な問題を抱えた家族などが存在しており、それらの個を寄り添いながらその関係性を支えることが重要である。

さらに、個を支える地域共生社会をどう実現するかが課題となってくる。地域は、住民互助が展開される自治会や校区単位、専門的援助の介入も可能な市町村域や広域など、「重層的なものとして認識されている。発題では、事例として神奈川県平塚市の取り組みや「高齢者元気創出プロジェクトTENRI」(天理市)を紹介、とくに後者は、天理大学や天理医療大学の教職員・学生も関わっており、そのビデオが上映された。このプロジェクトは、高齢者の自分史づくりである「その人物語」や農業を核としたまちおこしなどを活動の柱として進めており、旧来の福祉を超えた活動といえる。地域福祉の推進力は「出会う場」「協働する場」「協議する場」にあるが、上記の事例はこの3つの場づくりにつながる実践といえる。

その後、フロアの参加者との質疑応答が行われ、最後に高見宇造所長が「天理教社会福祉の視点から」として総括コメントを行った。高見所長は、明治43年の天理教養徳院創設に始まる天理教社会福祉の歴史を振り返り、「オール天理」と言った場合、天理教系の社会福祉施設が中核の一つとなるべきであると締めくくった。



「教学と現代」発題者を囲んで